

人権啓発作品を紹介します

人権作文 中学生の部
最優秀賞

双葉中学校二年
児玉 理紗さん

「命のバトンをつなぐこと」

私の毎朝の日課は新聞を読むことです。新聞にはおもしろくてためになるニュースがたくさん載っています。誰かが亡くなってしまうという暗いニュースも少なくありません。中でも「自殺」に関するニュースを目にする度に、悲しい気持ちになります。それは「かわいそう」というものだけではなく「ありません。」「どうして自分の命を自分で奪ってしまうのか」という疑問でもあるのです。自殺する人の数は、年々増えていると聞きました。それにはいろいろな理由があるのかもしれませんが、私はみんなが命の重みを考えなくなったからだと思います。私の周りにも、友達に向かって「死ぬ」と言うなど、命を軽く見ていると感じられる人がいます。命がどれほど尊く、大切なものかを知っていれば、自ら命を絶つことも、軽々しく「死」を口にすることも

できないはずですよ。

私は夏休みに入る前「生まれる」という映画を見ました。この映画は四組の夫婦と新しい命を通して、「生まれる」ことの奇跡を描いたものです。私の中でも、ある夫婦の笑顔が印象に残っています。実は、その夫婦の赤ちゃんは「一八トリソミー」という病気です。一八トリソミーの赤ちゃんは、お腹の中で亡くなるのが多く、生まれてくることもできません。そのほとんどが一年も生きることができないのだそうです。お腹の赤ちゃんが一八トリソミーだと分かったとき、夫婦は迷わず生む選択をしました。それはなかなか簡単にできることではないと思います。母のお腹に私ができたと、私の父も

「たとえ障がいのある子だったとしても、絶対には育てる。」

と言っていたのだと母から聞きました。私だったらそんなふうに見えるだろうかと考えてみましたが、やっぱり難しかったです。

映画の中の夫婦はずっと笑顔を絶やしませんでした。いつ子どもとお別れをする日が来るか分からない状況で、どうして笑って過ごせるのか、不思議になるほどでした。

しかし、夫婦の話を聞いてみると、不安がないわけではなかったのです。いつお別れすることになるか分からないからこそ、一日一日を楽しんで生きよう。そんな思いがその笑顔に込められているのだと感じました。夫婦は

「この子は今、全力で短距離走をしている。」
と言っていました。こんな小さな命でも、

一生懸命生きていることを目の当たりにして、はたして私はどうなのだろうかかと振り返らずにはいられません。まだ明日がある、あさつてがあると言って、今日すら大切にしていなかった自分に気づき、恥ずかしくなりました。生まれて一時間しか生きられないかも・・・一日かも・・・一週間かも・・・夫婦は、それがどんどん延びていく度に喜んだそうです。

映画の中では、無事に生まれることのできなかった命もありました。誕生日になるはずの日に、赤ちゃんはお母さんのお腹の中で亡くなってしまったのです。私は、それが他人事だとは感じられませんでした。私の父には二人の姉がいますが、本当はもう一人兄がいました。けれども、父の兄は生まれてすぐに亡くなりました。初めての男の子だったこともあり、祖母の悲しみも大きかったのでしょう。父は、祖母からそのことについてほとんど聞いたことがないそうです。ただ、

「あれほど悲しかったことは他にない。」とだけ言っていたと、父は教えてくれました。それでも男の子がほしかった祖父母は、父を生みました。父の命があるのは、父の兄のおかげとも言えます。そして、今自分がここに生きているのは奇跡だと思います。

もう一つ、父や私が生まれたことを奇跡だと思ふ理由があります。それは祖父のことです。私が小学三年生の時、学校の授業で祖父母を招いて戦争の話を聞く機会がありました。日本が戦争をしていた頃、祖父はまだ若かったのですが、戦場には行かずに働いていたそうです。

「あと数か月早く生まれていたら戦争に行つて、今頃ここにいないかもしれない。」

という祖父の言葉と、
「今、理紗ちゃんが生きているのは奇跡だよ。おじいちゃんに感謝しなくちゃね。」

と言った先生の言葉が、今でも心に残っています。

一番身近にあり、一番気がつかない奇跡。それが「命」だと思います。私の先祖が一人でも欠けていたら、私が生まれることはありませんでした。私達は何万人、何億人もの先祖から受け継がれてきた「命のバトン」を受け取りました。今度は、それを子孫に渡さなければなりません。苦しいことや辛いことがあっても、それを乗り越えて、自分の人生を最後まで走りきること。それが、今の自分が果たさなければならぬ義務なのです。命はどうして重いのでしょうか。それは、私達が一人ではなく、計り知れないほど多くの命と共に生きているからだと思つています。

11月15日号 12ページ

人権クロスワード
パズルのこたえ

「いじめ」をしないさせない
「み」の「が」が「さ」ない

当選者の発表は記念品の発送をもって代えさせていただきます。